

第十六 贈り物

去りながら不意の援兵は當にならず、書生連中二三人物好きにも大原の依頼を受けて小間物屋へ赴きしが途中にて相談を始め「オイ君は大原の為に上等の半襟を買つて遣る積りか、全體大原が女に向つて野心を起すとは滑稽だ子、僕の考へには何うせ滑稽で成立つて居るから此の半襟も滑稽の物を擇んだ方が宜い、僕等は大原に對して平正少し遺恨があるぜ、ナゼと云ふのに大原は三度の食事を我々の三四倍も食ふ、大きな飯櫃を一人で空にして汁なんぞは五六杯もお更りをする、家の内儀さんが漏まいことか、此の米の高いのに一人で四五人前も食べられては勘定に合はない、と云つて永年下宿していらつしやるお客様だし、副食物のお更りなら銭も取れるが飯の代を餘計に貰ふ事も出来んといつても愚痴計り言ふ、内儀さんの愚痴がそれなりで濟めば宜いがその損失は外の客の頭へか、つて毎日の副食物が斯んなに不味い、つまり大原に對する損を我々の方で埋合せるに違ひ無ひ、我々からして毎月大原の食料を幾分づ、拂つて居る様なものだ、僕はそれを知つて居るから何かの時返報をして遣らうと思つて居た、今日は丁度幸ひ、半襟の買入方は一切僕に任せ給へ、僕が一つ奇々妙々の進物を拵へるから」と人の悪るき書生先に立つて小間物屋に入り「オイ番頭、八十計りの婆さんがかける様な半襟で若い人に極く不向きなのは何だ」番頭「へい左様で御座いますな、先づ黒のフラシ天か何かで」書生「一つ幾らだ」番頭「上等で六十銭位、」書生「それが宜らう、それから、一番上等で一番大きな奉書の紙は一枚幾らだ」番頭「大奉書は一枚三銭で」書生「水引の一番大きいのは」番頭「一本二銭で」書生「一尺もある様な大熨斗は」番頭「一つ一銭五厘で」書生「宜しい、その大奉書二枚へ黒のハヤシ天とか何とか云ふものを」番頭「フラシ天で」書生「フラシ天か、それを庖んで大水引をかけて大熨斗をつけて呉れ」番頭も妙な注文かなと思ひつゝ、其通りに造りて客に渡しぬ、書生もその體裁の立派なるを見て満足し「是れなら上等代は幾らになる」番頭「へい、お半襟が六十銭、大奉書が二枚で六銭熨斗と水引で三銭五厘皆んなで六十九銭が五厘になります」書生「サア代を遣る、是れな

ら八十位な婆さんにかけて若い女には不似合だらうな、若い女にも用いられると少し不都合だが大丈夫かな」番頭「お若いお方には逆も向きません」書生「それで廉心した」と品物を携へてサツサと下宿屋へ戻り大原にそれを渡して大袈裟の吹聴「大原さん、小間物屋へ往つたところが今度新製の半襟で實に最屈強なものがありました、御覧なさい是れはブラツシ天と云ふものです」大原「成程、然し斯んなものを若い人がかけませうか」書生「それが濫い處で、此頃は何でも濫いものが大流行、貴君はそれを御存知ありませんか」大原「イヤ一向知りません、代價は」書生「六十九錢五厘」大原「廉い様ですな」書生「安いけれども珍らしい處に價値がある、マア之を持つて往つて御覧なさい、向ふの人が何んなに悦ぶでせう」と言葉巧みに押し付ける、大原は世事に疎し「何うか是れで向ふの心を惹き度いものだ」

第十七 お不在

心を籠めし贈物は書生の惡戯に成りしとも知らず、大原滿は奉書の庖紙が皺にならぬ様、かけたる水引が揉まれぬ様と後生大事に大なる風呂敷へ庖み、歩いても近き場所なるを贈物が大切とて車を雇ひ、心には天晴れお登和嬢を悦ばせんと期して急ぎ中川の家へ赴きたり、門に入りて窃に窺ふ家内の様子「ハテナ、今日はお登和さんの聲がしないぞ、何處へか往たか知らん、イヤ外へ往く所もあるまい、臺所に居るだらう」と頻に氣が揉める、主人の中川は狭き家とて人力車の門前に停まりたるを知り、如何なる客が来りけんと自ら立出で、格子戸を開き「ナンダ大原君か、何故臺所を覗いて居る、早く入らんか」大原漸く内に入て座敷へ通り「中原君、昨日は大きに御馳走だつた時にお登和さんは」主人「今不在だ」大原「オヤ、何處へお出掛だ子」主人「今日は小山君の所へ年始に遣つた」大原「それは残念」と失望顔、主人も不審に思ひ「何か妹に用でもあるのか」大原「イ、ヤ爾うでは無いが僕は昨日のお禮にお登和さんの所へ土産物を持つて来た」主人「土産物を、それは氣の毒だ子、爾んな心配は要らんに、僕が預かつて置かう」大原「イヤ、小山君の處なら僕も小山君の家へ往く用があるから向ふで差上げやう」と自分では手渡しにせん積り、主人の中

川も大原の様子が平生に異れるを知り「大原君、君もいつの間にか大層變化した子、人に土産物を贈るなぞとよく爾んな事へ氣が付く様になつた子、全體何を妹に呉れるのだ」大原「半襟だ」主人可笑しく「ウフ、君が半襟を買つて來たのか、餘程妙だな、前代未聞の珍事だ子、マア遊んで居給へ今に歸つて來るかも知れない」大原「爾うさ子、途中で行違ひになつても残念だから待つて居やうか、時に中川君、お登和さんは東京で何處へか嫁に遣る積りか」主人「好い口さへあれば遣り度いと思ふが、然し僕が女房を貰はない内は困る、僕が貰つてから彼を遣る積りだ」大原「爾んな事を言はないで早く遣り給へ今の内に」主人「だつてまだ貰ひ人も無い」大原「有るよ」主人「何處に」大原「何處にでもあるが子、斯ういふ事は機會だから機會を外すと却て良くない」主人「それは随分今でも好い口が出て急に呉れると云ふなら彼の為めだから僕の不便を忍んで遣らないとは限らん、然しまだ東京へ來た計りて誰にも會つて居ないし好い口の出る筈も無い、いづれ何處へか遣らなければならんから好い口の世話をして貰ふ様に今日は近づき旁小山君の處へ遣つた、小山君の妻君は中々世話好きだから子」大原「ウム、爾んな迂遠な方法を取らないでも近路は幾らもある、小山の妻君が世話をして呉れる處なら何處へでも遣るか子」主人「何處へでもとは言はれんが相當な處なら」大原「無論相當此上無しだ、マア僕もちよいと小山君の家へ往て見やう、左様なら」と例の大風呂敷を小脇に抱へ、劇て、戸外へ飛出したり、主人留めもせずして送り出し「君は何だか可笑しい子」

第十八 芋料理

小山學士の家にては妻君とお登和嬢とが座敷にて頻に料理談をなし居たるが妻君一々お登和嬢の説に感心し「成程貴嬢の被仰る通り家庭料理の本意は原料の廉い品物を美味しく拵へて食べるのと、棄てる様な者を利用してお料理に使ふのです子、今のお話の萬年スープだの鯛の頭のお料理なんぞは早速私も始めませう、然しお話し計りでは中々覺えられませんが、恐入りますけれど何か一つ二つ料理をして見せて下さいませんか、稽古の爲めですから高い品物は無益ですし、廉い品で

臺所に在るものは爾うです子薩摩芋なら川越の上等が澤山買つてあります、里芋も御座います、そこに今朝魚屋が章魚を持つて來ましたから買つて置きました、乾物では干瓢に椎茸もあります、お豆腐は直ぐ近所で買へますし、爾んなもの、中で何か一つお料理を教しへて下さいませんか、薩摩芋は煮るとかお汁にするとかの外に美味しく食べる工風がありますまいか」お登和「爾うで御座います子、ちよいとした事なら薩摩芋の梅干壘が結構です、それから牛乳を入れたマツシ、寒天の寄せ物、米利堅粉と玉子を入た蒸物、お芋のフライ、織に截つた煮物、食後のお菓子で茶巾絞りなんぞが宜しう御座いませう」妻君「爾んなに色々なお料理方がありますが、それでは一つ薩摩芋のお料理を教へて下さいまし、失禮ですけれども臺所へいらして」と自ら立つて臺所へ誘ふ、下女は妻君の命によりて料理に必要な道具を前へ持出したり、妻君先づ芋の大なるものを選び「お登和さん、何から先へ致しませう」お登和「爾うです子、何に致すにも一旦先へ湯煮ますから湯煮る様に皮を剥いて截つて當つて下さい、私が今此方を織に截ります」と自分は庖丁を取りて芋の織を截り始む、その内に妻君と下女は芋を適度に截りて鍋に入れつ、妻君フト顧りみ「お登和さん、大層マア長いセンが出来ました子、二尺も三尺も何處迄も切れないのが不思議です、よく爾う綺麗に平に出来ます子」と打驚く、お登和尚ほ手を停めず「イ、エ私は下手で御座います、上手な人はモット綺麗にモット細く何處までも切れずに致します、全體薩摩芋より里芋の方がセンにすると綺麗に出来ます、オヤモーそちらのが湯だりましたか、それならば一度よく湯でこぼして下さい、お芋のアクが抜けます、エート先づ梅干あへを拵へませうか、そのお芋を少し計り裏漉しにして摺鉢へ入れて下さい、それから梅干の種を除つて矢つ張り裏漉しにして一所に入れて下さい、それへお砂糖を交せてよく摺れば出来ます」妻君「お鹽は」お登和「梅干の鹽氣で澤山です、それでモー梅干あへが出来ました、もつと上等にするには別にお芋をサイの目に切つてお鹽とお砂糖で煮て、それを此の梅干あへに交ぜると宜う御座いますし、百合を煮て交ぜると大層美味しくなります」と一々原物に就て教ゆるに妻君熱心に習ひて其味を試み「成程良い風味です子、此次は何に致しませう」お登和「ゆでこぼしたお芋へ今度こそお鹽とお砂糖で味をつけて下さい、それから裏漉しにして牛乳を交せて摺るとマツシと云

つてキントンの衣の様なものになります、茶巾絞りはお團子の位な大きさに茶巾で絞るので、フライにするには平たく押し玉子と米利堅粉を衣をかけてサラダ油で揚げるのです、林檎のフライも林檎を薄く切つて其通りに致します、寄せ物は寒天を煮て其中へ漉したお芋を入れて固めるのです、蒸物は少し面倒ですがそれへ米利堅粉と玉子とを入れて全體ならカステラ鍋で一時間ほど蒸焼にするのですが只お湯で蒸しても宜う御座います」と平生は廉物と輕んぜらるゝ薩摩芋がお登和嬢のお蔭にて今日は上等料理に出せしたり、

第十九 人の噂

妻君は料理に夢中なり「薩摩芋が斯んなに美味くなるなら値段の高い物計り買はないで毎日お芋料理を致しませう、そのセンは何うなさいます」お登和「是れは鹽湯を沸た、せてそれへ此のセンを入れてザツト湯で、水でよく洗ひます、鹽で締りますから切れません、今度は水を入れて鹽とお砂糖で味をつけますが長く煮過ぎると切れて了ひます、その煮加減が少し六か敷いので」と自分で残らず拵へて見せる、妻君感嘆し「マア綺麗ですこと、お三やちよいと御覽、誰が見てもお芋と思へない子、良人が旅から歸つて参りましたら黙つて之を出して見ませう、屹度吃驚致しますよ、まだ外にお芋の使ひ方は御座ませんか」お登和「體裁をかへればまだ色々なものになります、湯で、裏漉しにしてお芋を一日乾してお餅を搗く時お米と一所に蒸して蒸し込みますと大層美味しいお餅が出来ます、それは上等の油で揚げて食べるのが一番です」妻君「爾うで御座いますか、今に寒餅を搗かせますから試して見ませう、葛を入れたお餅は暮れに搗きましたけれども、まだ外に變つたお餅はありませんか」お登和「大豆を生のみ、碾臼で挽いてそれを二升到五勺位な割で海鼠餅に碾き込みますと乾きが惡う御座いますけれども力キ餅にして焼きました時お砂糖入りの力キ餅よりもよく膨れて輕う御座います」妻君「爾うですかそれも試して見ませう、お餅を截る時庖丁へ截口が粘着いて困りますが好い法はありませんか」お登和「大きな大根を側へ置いて先づ庖丁でザクリと截つてはお餅を截り又大根を截つてお餅を截るとお餅が粘着きません」妻君「それは好い事を伺ひました、貴嬢はよく爾んなに料理の事をお覺えです子。

私なんぞは娘の時分少しも料理の事を心掛けませんでしたから嫁に来て急に困りました、何でも娘の時無益な事を稽古しないで料理法を習つて置かなければなりません、貴嬢をお嫁に貰ひなさるお方は何んなにお徳だか知れませんか、失禮ですが貴嬢は東京でお嫁にいらつしやいますか」お登和「何うなりますか分りません、兄や親の都合次第で御座います」妻君「東京でお嫁にいらつしやると宜う御座います子、いつまでもお近所に居てお料理の事を教へて戴きます、才ホ、自分の勝手計り申して、貴嬢なんぞは何んな好い處へでもお嫁にいらつしやられますよ、ですが氣心の知れない人の處へいらつしやるよりお兄さんのお友達か何かで氣心の知れた人の方が宜う御座います子、昨日貴嬢のお家へ大原さんと云ふ人がおいで、したか」お登和は名を聞いてさへ可笑しくなり「ハイあのお方は何かよく召上ります子」とさも驚いた様に言ふ、妻君も共に笑ひ「あの人の大食は名代です、然しあの人は大食の外に悪い所が少しもありません、正直でおとなしくつてそうして心が極く實體ですよ」と為めにする所ありてか良き點のみを擧げぬ、お登和嬢は惡き點のみを知れり「ですがあのお方は幾度も落第をなすつて去年やつと御卒業だつたそうです子」妻君「ハイ、それは爾うですけれども御自分から頭の鈍い事を被仰つて外の人の二倍も三倍も勉強なさるそうです、あ、いふ人の方が後世畏るべしだと良人でも申して居りました、此節の才子と云はれる人は直ぐ物を覺えて直ぐ忘れて勉強と云ふ事をしませんから學校を出ると其先は進歩しません、大原さん計りは極く遅い代りに死ぬまで進歩するだらうと云ふ人がありますよ」お登和「爾うで御座いますか子」と容易に信ぜずして心に大原を輕ろんずる様子あり、折から表に「お頼申す、今日は」と大原の聲聞ゆ、

第二十 大得意

大原の聲を聞きて妻君は座敷の方へ赴けり、お登和嬢も續いて立ちぬ、去りながら妻君の今の言葉が少しく氣にかゝりて足も前へ進まず、もしや妻君が我身をあの人にお世話せんとする心にはあらぬかと氣味の惡き様に覺えて臺所の口に立つたま、窃に座敷の様子を窺ふ、大原は

携へ來りし大風呂敷を大切そうに脇へ置き「奥さんお登和さんは此方に来ておいで、すか」と挨拶より先に其事を問ふ、妻君その様子の劇でたるを笑ひ「ハイ來てお在です、モシお登和さん」と振り返りて呼びけるにお登和も詮方無く座敷へ入りしが心に憚る事ありけん、餘所々々しく大原に黙禮せしのみ、成るだけ遠く離れて坐を占めたり、大原は昨日の御馳走にてズツト親しくなりし量見「お登和さん昨日は誠に御馳走さま、僕は昨日のお禮にお登和さんへ差上げ度いと思つて半襟を持つて來ましたが今中川さんへ寄つたら此方へおいでだと云ふことで急いで遣つて來ました、是れが其半襟で」と恭しく風呂敷抱みを取りて庖み紙の折れぬ様大切そうに抜き、大奉書に大水引のかゝりたるを取出したるが大熨斗の先の斜めに折れたるを手にて撫で展ばし「お登和さん失禮ですけれども」と勿體らしく差出たり、お登和は愈よ氣味が惡し「イ、エ爾んなものを戴きましては」と辭退して受けそうも無し、妻君大原の様子が可笑しきに堪えねど笑ふにも笑はれず「お登和さん、折角のお土産ですから」と大原の為に言葉を添ゆる、大原はお登和嬢が謙遜して受けぬと思ひ「中川さんにも今爾う申して來ました、お受け下さらんと僕の志が無になります、是れは態々貴嬢に差上げる積りで近頃新製の珍らしい半襟を擇んだのです、何卒御受納下さい」と手を出してお登和嬢の方へ押し遣る、お登和嬢はしり込して身を退去る、妻君が仲に入れて頻にお登和嬢を説きければ嬢も詮方無く「それでは戴きませう、難有う御座います」と不勝無性に受けて脇へ置きしまゝ、中の品を見んともせず、大原は張合無さそうに嬢の顔を眺めて居る、妻君も遂に可笑しさを堪え得ず「大原さんが半襟をお買なすつたのは生れてから始めて、せう、何んな品をお見立なすつたか、お登和さん、外のお方で無いから此でお見せなさいな」お登和は別段に見度くも無き様子にて只ハイと庖みたる儘を妻君に渡す、妻君先づその大水引と大熨斗に驚き、お登和の居らぬ時ならば早速惡る口を利き出さん場合なれどもお登和嬢の前にて大原を輕蔑する様に見せては後の為め惡しかりなんと笑を忍び「お登和さん出して見ても宜う御座いますか」お登和「ハイ」と氣の無き返事、大原は早くお登和嬢に品物を見せしめて悦ぶ顔が眺め度しと心も窃に躍る計り、妻君は定めて上等の縮緬に花など縫ひしたる立派な襟ならんと思ひ、そつと水引を抜き、大切に庖み紙を抜きて中の品物を取り出し「オヤ」と一聲叫びぬ、お登

和もちよいと覗きて驚きたる様子、大原心の中に「成程非常の珍物だ、此の人達が斯んなに驚く程だから」と内々愉快に堪えず、